

# 伊豆の踊子

## 映画文学人生論

川端康成 (1899-1972)

『伊豆の踊子』(1925) 「文芸時代」

『雪国』(1935-1947) 「文芸春秋」ほか

『眠れる美女』(1960) 「新潮」

『美しい日本の私』(1968) 「記念講演」

物乞い旅芸人村に入るべからず

『伊豆の踊子』は『雪国』の青春篇である。踊子の薫と素人芸者の駒子は別人物、私と島村も別人物だが、「私」の意識は連続している。

伊豆を旅する私は二十歳。高等学校の制帽をかぶり、紺飛白（こんがすり）の着物に袴をはき、学生カバンを肩にかけていた。

道がつづら折りになって、いよいよ天城峠に近づいたと思う頃、雨脚が杉の密林を白く染めながら、すさまじい早さで麓から私を追ってきた。

私は一つの期待に胸をときめかせて道を急いでいるのだった。ようやく峠の北口の茶屋に辿りついてほっとすると同時に、あまりに期待がみごとに的中したことを知り、立ちすくんだ。そこで旅芸人の一行が休んでいたのだ。

突っ立っている私を見た踊子が直ぐに自分の座布団を外して、裏返しに傍へ置いた。「ええ・」とだけ言って、私はその上に腰を下ろした。坂道を走った息切れと驚きとで、「ありがとう」という言葉が喉にひっかかって出なかったのだ。

踊子は十七くらいに見えた。私には分からない古風の不思議な形に大きく髪を結っていた。それが卵形の凛々しい顔を非常に小さく見せながらも美しく調和していた。

「そうかねえ。この前も連れていた子がもうこんなになつて、お前さんも結構だよ。こんなに綺麗になつたのかねえ。女の子は早いもんだよ」と



# 伊豆の踊子

茶店の婆さんが旅芸人の女に話していた。

小一時間経つと、旅芸人たちが出立つらしい物音が聞こえてきた。私は、胸騒ぎするばかりで、立ち上がる勇気が出なかった。

それでも、じっと坐っていられないので、心付けを渡して、旅芸人の後を追おうとすると、「旦那さま、旦那さま」と叫びながら、婆さんが追っかけてきた。「こんなに戴いては勿体のうございます。申し訳ございません」。

やがて、私は旅芸人の一行に追いつき、話をかわすようになった。旅は道連れ、世は情。だが、途中、ところどころの村の入口に立札があった。

——物乞い旅芸人村に入るべからず

旅芸人は差別されていたのだ。私は高校生で、旦那さんと呼ばれる身分だが、差別はしない。

「いい人ね」

「それはそう、いい人らしい」

「ほんとにいい人ね。いい人はいいね」と、踊子が姉と噂をする声が聞こえてきた。

そして、別れの時がやってくる。下田の乗船場に近づくと、海際にうずくまっている踊子の姿が私の胸に飛び込んだ。傍に行くまで彼女はじっとしていた。私はいろいろ話しかけてみたが、踊子は掘割が海に入るところをじっと見下ろしたまま一言も言わなかった。

さよならも言えず 泣いている

私の踊子よ ああ、船が出る